

「すぐに役立つ広報紙づくりの簡単テクニック」 ～目を引く写真の撮り方やレイアウトのヒント

※以下は、当日のスライド(パワーポイント)の概要を箇条書きにしたものです

【読み手の目線の動きを理解】

- 読み手は、無意識のうちに「興味・関心のある情報」を取捨選択している(例:新聞)
- どんなに良い文章よりも、まず写真(次に見出し)に目がいく
 - 写真は文章よりも、説得力、伝える力、訴える力が圧倒的に高い
- 写真の中でも目を引くのは人の顔(表情)
 - 人間の心理として、まず人の顔(表情)に目がいく(特に笑っている表情)

【目を引く写真の撮り方のヒント】

「笑顔」＝口角が上がり、歯が見えている表情→明るく楽しく親しみやすさを表現

<個人写真編>

- すぐに撮影を行わず、雑談などをして打ち解けてから撮影する
- 「ハイチーズ」の一発撮りをしない(集合写真も同様)
- コミュニケーションをとりながら撮影する(無言で撮らない)
- 笑顔を引き出せるまで諦めない
- その場を和ませる声かけを試みる(撮影者も頑張ってテンションを上げる)
 - (例)「〇〇先生、硬すぎでーす!」「いやー今日のネクタイきまってますねー!」
 - 「福〇雅〇になったつもりでお願いします!」「今年一番の笑顔を作ってください!」
 - 「〇〇先生が笑ってくれないと帰れませーん!」など笑わせるネタを仕込んでおく
- ファインダー・モニター越しで撮影を続けない(相手も撮影者の顔が見えると安心する)

<集合写真編@先生>

- 立ち位置は、広報委員が指示・誘導する
- 極端なくらい、くっ付いてもらう(隙間が空いてしまうと連帯感がなくなる)
- 立ち位置(顔かぶり)の確認などは補助者が行い、撮影者のサポートにまわる
- 先生が5人以上の場合は2列になってもらう
- 先生が3人の場合、両隣の先生が内向きに立つと立体感を表現できる
- 屋内ではストロボ光の影が出ないように注意する(壁から離れてもらう)
- ポロっと笑顔を見せた瞬間を逃さず連写する(同じ表情を漫然と撮影しない)

<集合写真編@子ども>

- 好きな給食、アニメなどの子どもたちが食い付く質問をしてみる<低学年向け>
- 子どもたちをその気にさせる（かっこいいね～などと褒めてみる）<〃>
- 人気キャラクターを用意し、補助者が撮影者の背後から気を引かせてみる<〃>
- 子どもたちと顔馴染みの先生に、声かけなどのフォローをしてもらう
- 子どもたちが集中できる時間はわずか。笑顔の瞬間を逃さず連写する
- ポーズを付けてもらい躍動感を表現（記念撮影写真とは違うインパクトを出せる）
- クラスごとにロケーション（撮影場所）を変えるとメリハリを出せる
- 黄色帽子やプラカード、工作などの小物を持ってもらいアクセントを付けてみる

<スナップ写真のカメラアングル>

- カメラアングル（撮影角度）は、「ローアングル」「アイレベル」「ハイアングル」
- 「ローアングル」は、見上げて撮影するため、力強さと躍動感を表現できる
- 「アイレベル」は、立ち上がったときの目線（普段見慣れた光景）
- 「ハイアングル」は、見下ろして撮影するため、空間の広がり表現でき、会場全体の様子やにぎわいを伝えることができる
- 見慣れた「アイレベル」だけの撮影だけでなく「ローアングル」「ハイアングル」で撮影することで、いつもと違ったインパクトのある写真を撮ることができる
- （※手ぶれが起きないように、カメラは両手で持ち、両脇をしっかり締めて構える）

<写真の主役は子どもたち>

- 狙うのは子どもの表情。「主役・脇役」を意識する（例：動物園・消防署・工場見学等）
- 主役（子どもの顔と表情）を撮るために、撮影者自らが前後・左右に移動する
- 被写体に「近すぎかな」と感じる位置から、さらにもう一歩前に踏み出して撮影する
- 運動会などでは、懸命に応援している子どもたちの姿も撮影しておく

<撮影前の準備>

- どんな写真を撮りたいか、当日どう動けばそれが撮れるか事前にイメージしておく
- 自校や他校の広報紙のバックナンバーを参考にして、イメージを膨らませる
- 運動会などのイベント時は、事前にプログラムを入手し、担当者に話を聞いておく
- カメラの記録画質・画質モードは「最高画質」に設定しておく（後でトリミングが可能）

<スナップ写真のフレーミング（枠）>

- 会場全体の雰囲気が分かる様子を撮る（遠景写真）
- 子どもたちが何をしているのかが分かる様子を撮る（中景写真）
- 子どもたちがどんな表情をしているのが分かる様子を撮る（アップ写真）
- 写真レイアウト時に、「遠・中・アップ写真」を掲載することでメリハリが出る
- 横写真だけでなく、意識的に「縦写真」も撮っておく

【目を引くレイアウトのヒント】

「大幅なレイアウト変更は労力大」＝ちょっとした写真の配置や見出しの工夫で見違える

<写真のレイアウト>

- 被写体（子どもたち）の視線や向きが、紙面の中央に向くように配置する
→子どもの視線の向きが紙面の外側にいくと、読み手の目線も一緒に外に逃げてしまう
（※これを防ぐため、同じシーンであっても、左右両側から撮影することを心がける）
- 個人写真を並べるときは、「頭」・「目」・「口」・「あご」のラインをそろえる
- 遠景・中景・アップ写真を組み合わせて配置すると紙面に臨場感が生まれる
→子どもたちの写真が同じフレーミング（表情がわからない）だと紙面が単調に見える
- 写真のサイズに大小をつけると紙面に躍動感が生まれる
→同じサイズ（小ぶり）の写真を並べると紙面が単調に見える（メイン写真があるとよい）
（※好事例：「滝川小PTA広報第153号」＜平成27年12月1日発行＞を参照）

<文章のレイアウト・書き方>

- 文章で言いたいことを一言にまとめた「見出し」を付ける（多少文章を削ってでも）
→文章が長くて、何が言いたいのか読み手に伝わるので、スムーズに文章に入れる
- 文章の書き出しの「1文字」を大きくしてみる（最近のはやり）
- 文章スペースに制限がある場合、写真にキャプション（説明文）を入れてみる
→キャプションを入れることで、写真の情報量が増えることで、文章を補完・省略できる
- 文章は「5W1H」が基本
→「いつ・どこで・誰が・何のために・何をして・どのようにしていた」を入れる
- イベントの紹介記事の文章の1文は短く（接続詞でつながない）
- 参加した子どもたちや先生のコメントを文章に入れてみる（例えば、何が楽しかったのか）
→その場にいた人が感じたコメントは、何よりも説得力・臨場感を読み手に与える

<文章表記>

- 文章表記については、新聞記事や自治体広報紙などでは統一された基準がある。
→文章表記は各学校の判断に拠るが、「記者ハンドブック～新聞用字用語集」（共同通信社発行）を参考にすると「分かりやすくやさしい文章」に近づく

（△）記者ハンドブック表記【例】	（○）同左表記【例】
子供達、みなさん、挨拶、 すべて、様々、嬉しい、～出来る、 わかりやすい、～する時	子どもたち、皆さん、あいさつ、 全て、さまざま、うれしい、～できる、 分かりやすい、～するとき

<肖像権への配慮>

- 写真掲載の保護者の同意状況を、学校に十分確認しておく
- 撮影時、学校関係者であることが一目で分かる「腕章」や「名札」を身に付ける